

平成22年12月15日

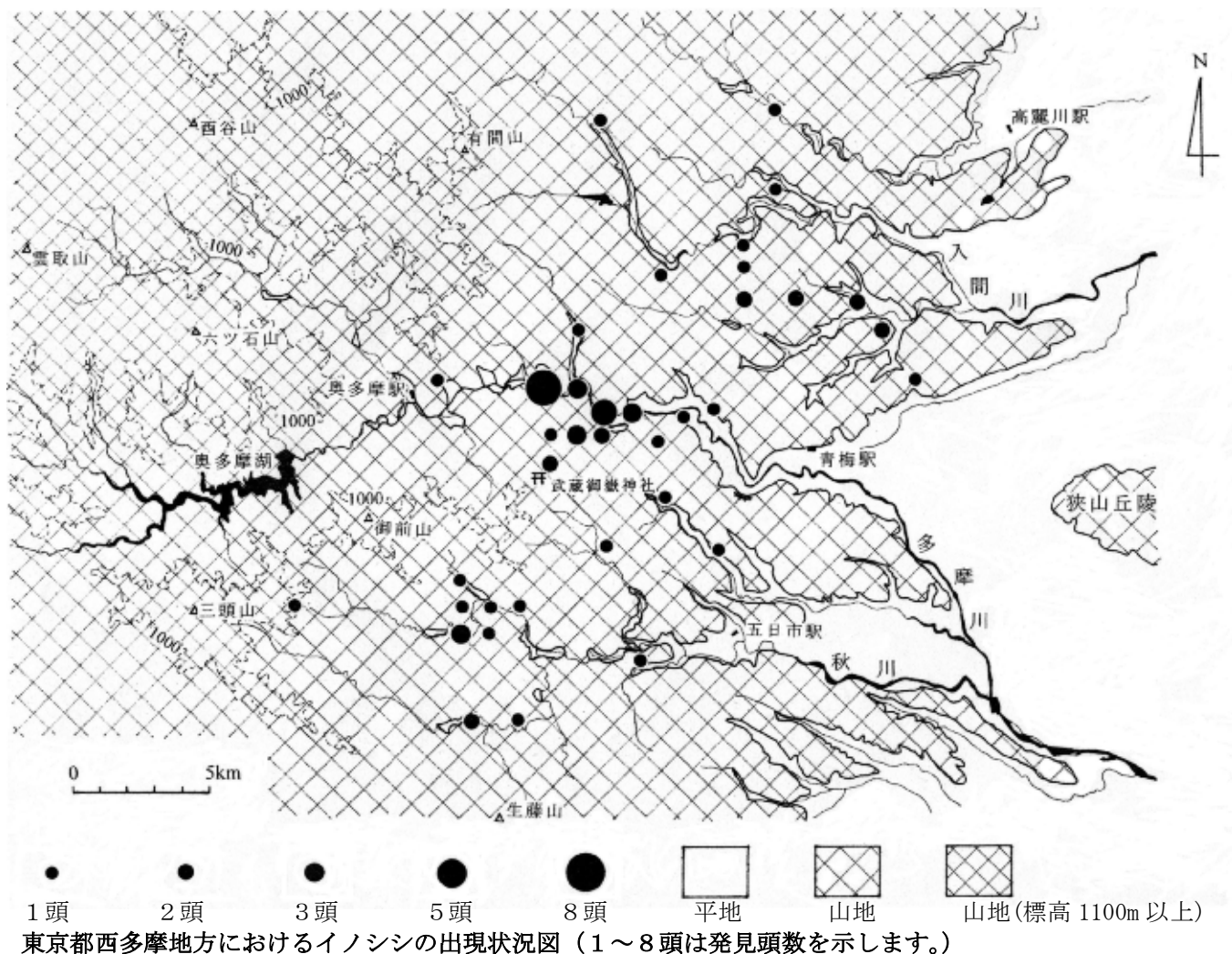
発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

イノシシの出現と武蔵御嶽神社

各地からの農作物の獣害の状況が伝えられている。被害を引き起こす動物の中で最も多いのはイノシシである。イノシシは人間とほぼ同じ物を食べるため、私たちにとっては身近な害獣である。

下図は、専修大学附属高校の教員であった故東海林隆夫氏が、地域住民たちの協力を得て精力を傾けて調査した、西多摩地方を中心とした地域におけるイノシシの出現状況図である。図によると、西多摩地方でイノシシの出現が多いのは青梅市御岳から奥多摩町古里にかけての一带で、急峻な山地内での目撃はほとんど無い。実際、日原川流域や御岳山周辺の山地を歩いていても、ヌタバ（泥浴び場）になりそうな場所は各所にあるが、イノシシがヌタ打ち回った（泥浴のこと）痕跡や、ミミズを探すため表土層を掻き回した跡はほと



んど見あたらない。一方、作業用の小型自動車を通る林道の脇にある小さな水たまりや、人家が近くにあって湿った軟らかそうな土がある所には、ヌタ打ち回った痕跡が多く見られる。このことから、イノシシはエサとなる農作物が多い集落の近くに生息していることが明らかである。

市内和田には、南側の山地から降りてくるイノシシを防ぐため、林地と畑地の境にシシ堀と呼ばれる空堀が残っている。延長約 800m で、途中四カ所に落とし穴が設けられている。詳しくは『青梅市文化財保護指導員活動報告書』（第 18 号・2002 年）を読んで頂きたい。

さて、武蔵御嶽神社境内に祀られている
すめみまのみことしゃ 皇御孫命社の眷属は、けんぞく 狛猪である。こましし 基壇の上に乗る狛猪は安山岩製で、高さ約 41cm、鼻先から尻までは約 54cm の大きさである。

向って右側の像には、正面に「奉寄付／諸壇為／繁栄造／□□／當山／馬場出雲／藤原胤秀」とあり、裏面には「文化五戌／辰年」、内側には菊の紋がある。一方の、左側の像には、正面に「奉寄付／五穀為／豊穰造／□□□／當山／馬場出雲／藤原榮澄」とあり、裏面には「六月／吉日」、内側には葵の紋がある。

これらの彫文から、狛猪は五穀豊穰や諸壇繁栄を祈願し、文化 5（1808）年 6 月に建立したことが分かる。猪を眷属とする神社は、岡山県和気郡和気町にある和気神社など数ヶ所で、そのほとんどがイノシシによって難事を救われたという伝説のある和気清麻呂（733～799）と関わりが深い神社である。武蔵御嶽神社には清麻呂に関する言い伝えはまったく無いため、どのような理由で狛猪が立つようになったかについては不明であるが、イノシシは一度に 3～5 匹を出産し、高い生活力を持つことから、豊穰や繁栄と結び付けて奉納されたとも推定される。それほどまで講中にとって、イノシシは身近な存在であったのであろう。しかし、住民たちにとっては、イノシシは身近な動物であるとともに、害獣でもある。



武蔵御嶽神社境内皇御孫命社の狛猪

（文責 角田 清美）